

fukada

深田遺跡（2～4次調査）

福岡県八女市酒井田・緒玉所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第93集

2012

八女市教育委員会

fukada

深田遺跡（2～4次調査）

福岡県八女市酒井田・緒玉所在遺跡の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第93集

2012

八女市教育委員会

序

八女市の西南部、筑後市と境を接する三河地区には弥生時代から中世にかけての遺跡が地下に数多く存在していると考えられ、相当数の土器や石器などの破片が地表に姿を現しています。その様相を見ると、まさに『遺跡銀座』が地面の下に眠っていると言っても過言でない状況です。

三河地区における本格的な発掘調査の開始は、ほ場整備の歴史と共に始まります。

昭和50年代後半から始まった八女南部ほ場整備事業を発端とし、福岡県教育委員会や八女市教育委員会が主体となって調査を行いました。弥生・古墳時代の集落や墳墓が多数発見され、また、中世を生きた地場の豪族達の足跡も多く発見されました。

中でも平成4年に発見された深田遺跡は、当時西日本最大級の古墳時代前期の豪族居館として取り上げられ一時脚光を浴び、平成20年には八女市指定文化財となりました。

しかし、近年の調査・研究においては、これまで「豪族居館」と呼ばれていた遺跡に再検討を必要とする意見が出るようになり、本遺跡についても検討すべき時期が来ているものと思われます。

今回の報告は平成3年に行われた調査の内容を補完すべく遺跡内容確認調査を行った結果であり、より精度の高い情報を公開する事で地下に埋没している遺跡に対する深いご理解を頂く事を目的としております。この報告書が当該遺跡のみならず、市内に点在する文化遺産を深く理解する一助となり、より文化財愛護の心を育むことに寄与出来るのであれば幸甚の極みであります。

最後に、当該遺跡の発掘調査に格段のご理解を頂きました地権者様をはじめとする関係各位、及び、地元町内の皆様方には並々ならぬ協力と応援を頂きました。

深く御礼を申し上げるとともに、今後の文化財行政につきまして、これまで以上の暖かいご声援を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

平成24年3月31日

八女市教育委員会

教育長 西島 民生

例 言

- 1 本書は、八女市酒井田字深田 他所在の深田遺跡 2～4 次調査における発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は八女市教育委員会が実施している。
- 3 発掘調査で検出した遺構の名称・番号については、平成 3 年度調査時に準じて付している。
- 4 本書に使用した現地測量図については調査担当者を中心として参加者で分担して行った。
出土遺物の整理については、岩戸山歴史資料館において行った。
- 5 本書に使用した現地写真は各担当者が撮影した。出土遺物については岩戸山歴史資料館において大塚が撮影した。
- 6 本書使用の方位については、すべて磁北である。
- 7 本書の執筆、及び、編集については大塚が行った。この折、平成 21 年度に刊行されている報告書（八女市文化財調査報告書第 71 集）を参考とした。
- 8 本書に関する調査記録、及び、出土遺物は八女市の岩戸山歴史資料館において保管・収蔵している。

本文目次

1	調査の経過	1
	A 調査に至る経過	
	B 調査体制	
2	遺跡の立地と歴史的環境	3
3	調査の内容	7
	発掘調査の概要	
	A 2次調査	9
	遺構と出土遺物	
	B 3次調査	14
	遺構と出土遺物	
	C 4次調査	20
	遺構と出土遺物	
4	まとめ	26

挿 図 目 次

第 1 図	深田遺跡（2～4次調査）周辺の遺跡分布図 [1/25,000]
第 2 図	深田遺跡（2～4次調査）位置図 [1/5,000]
第 3 図	深田遺跡 SX-05 全体図、及び、2次調査～4次調査地点位置図 [1/600]
第 4 図	深田遺跡 2次調査 遺構配置図 [1/100]
第 5 図	深田遺跡 2次調査 SX-05 南側土層断面図 [1/30]
第 6 図	深田遺跡 3次調査 遺構配置図 [1/100]
第 7 図	深田遺跡 3次調査 SX-05 西側土層断面図 [1/30]
第 8 図	深田遺跡 3次調査 SX-05、SK-45 出土遺物実測図 [1/3]
第 9 図	深田遺跡 4次調査 遺構配置図 [1/100]
第 10 図	深田遺跡 4次調査 SX-05 南側土層断面図 [1/30]
第 11 図	深田遺跡 4次調査 SX-05 出土遺物実測図 [1/3]
第 12 図	八女市内遺跡群 遺跡位置図 [1/60,000]
第 13 図	樋の口遺跡 2次調査 1 地点 遺構配置図 [1/1,200]
第 14 図	南筑後周辺の遺跡群 位置図 [1/300,000]

表 目 次

第 1 表	出土遺物観察表
-------	---------

図 版 目 次

PL 1～PL 6	深田遺跡 2～4次調査 遺構写真
PL 7～PL 8	深田遺跡 2～4次調査 遺物写真

1 調査の経過

A 調査に至る経過

八女市の南西部に位置している三河地区周辺は、本格的な発掘調査に着手される以前より表面採取される縄文時代や弥生時代の遺物から、八女市内においても有数の埋蔵文化財包蔵地であると考えられて来た。

昭和50年代後半頃から事業展開された八女南部は場整備事業に伴う発掘調査により、緒玉・酒井田地区を中心とした周辺部に大規模な埋蔵文化財の包蔵が展開していることが明確となった。以降、発掘調査事業が一段落する平成7年度に至るまでの間、は場整備事業者との地道な折衝を重ね、掘削が埋蔵物に及ぶ部分についてのみ発掘調査を行い、これ以外については現状保存の策が採られた。

深田遺跡については、全体面積の約1/4程度の発掘調査を平成3年度中に行っており、これ以外は現状保存となっている。今回の調査はこの現状保存の部分について行い、1次調査で明確に出来なかった環濠部分(SX-05)の詳細な堆積状況や築造・埋没時期について把握し、その性格の一端にせまる事を目的とした。

B 調査体制

【平成21年度】 (第2次調査)

〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	中島 清志
社会教育課長	飯田 せつ子
同課長補佐	江崎 邦博
同 係長	赤崎 敏男
同 係員	中川 寿賀子
同 係員	大塚 恵治 (調査担当)

【平成22年度】 (第3次調査)

〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	西島 民生
教育部長	飯田 せつ子
文化課長	井上 富雄
同 係長	中川 寿賀子
同 係員	大塚 恵治
同 係員	永田 寧 (調査担当)
同 係員	樋口 真弓

【平成23年度】 (第4次調査)

〔調査主体〕 八女市教育委員会

教育長	西島 民生
教育部長	飯田 せつ子
文化課長	井上 富雄
同 係長	大塚 恵治 (調査担当)
同 係員	永田 寧
同 係員	渡部 真弓

なお、発掘調査にあたり地権者である石塚様、丸林様、そして耕作者である梅野様をはじめとし、近隣に居住される住民の皆様、そして酒井田地区の方々には多大なるご配慮とご理解を戴きました。

また、以下の方々においては調査期間中多大な御指導・御協力を頂きました。記して感謝申し上げます。

(順不同、敬称略、当時)

佐賀大学名誉教授 佐田茂、福岡市教育委員会 長家伸、熊本市教育委員会 文化課 檀 佳克、福岡県教育委員会 文化財保護課 吉村靖徳、久留米市 市民文化財課 神保公久、小澤太郎、塚本映子、みやま市教育委員会 生涯学習課 田中康信、猿渡真弓、筑後市教育委員会 社会教育課 小林勇作

2 遺跡の立地と歴史的環境

【地理的環境】

八女市は平成22年2月1日に旧八女郡に所在していた立花町、黒木町、星野村、矢部村の2町2村と合併し、福岡県下で2番目に広い行政区域をもった新たな「八女市」としてスタートする事となった。

現在、西を筑後市、東を大分県日田市、南を熊本県山鹿市と接する広大な県境の自治体となり、多様な生産活動が見られる希有な行政体となっている。東の山間部では杉や檜を中心とした林業が盛んであり、その地形を巧みに利用した文化的景観としての棚田も多数見られる。また、中山間部においては地域の気象条件の恩恵を受け、高級茶葉である玉露や良質な巨峰などの生産が盛んに行われている。平野部では福岡県産の苺の主力である「あまおう」や梨、電照菊などを生産している。

これらの生産活動を可能にしている立地は、耳縄山地と福岡・熊本両県を区する筑肥山地により「コ」の字状に囲まれ、福岡・大分・熊本県との境にそびえる三国山（標高994m）に源を発し有明海に向け西流する一級河川である矢部川が形成したものである。流域面積647km²を誇る福岡県下第3の大河であり、古来より水上運搬に供され現市域で行われた産業すべての要であった。

しかしながら、時代の流れとともに八女市内で生産される文物の大半は陸上輸送に徐々にシフトし、今では水上輸送手段はほぼ皆無となっている。

現在の交通事情を概観すると、八女市内には大分県まで延びる国道442号線が東西に走り、交通量の増大に比例しバイパス道路の建設・開通も急ピッチで進んでいる。また、西部地区には九州の大動脈である国道3号線や九州縦貫自動車道が南北を貫いており、八女西部地区はまさに九州のクロスロード的な性格を持っている。

【歴史的環境】

深田遺跡2～4次は福岡県八女市酒井田字深田 他に所在している。

当該地周辺は以前より弥生時代から中世を中心とした埋蔵文化財が数多く存在している地区として知られており、特に昭和50年代後半以降では、ほ場整備事業等により弥生時代後期に属する大規模遺跡な集落や墳墓群の発見が相次いだ。また、古墳時代の集落や中世の遺跡群も発見され、当地区における埋蔵文化財の概要が明らかになってきた。以下、八女市西部における概要を記し、当遺跡を理解する一助とした。

（概要）

八女西部地区における遺跡の初現期は縄文時代前期まで遡る事が出来、国武遺跡群や平田遺跡群等では押型土器が数多く出土している。同後期に入ると、南西部のアモメ遺跡において小規模な円形の竪穴式住居や、少数ながら墳墓が見られるようになり、移動狩猟採集生活から定住化の兆しが見られるようになる。

弥生時代に入ると、立野・大坪遺跡や亀ノ甲遺跡、宿町遺跡等の前期後半の環濠遺跡が出現する。立野・大坪遺跡や宿町遺跡は直径100m前後の貯蔵穴専用環濠と思われるのに対し、亀ノ甲遺跡の環濠は推定直径200mを超える大規模なものであり、全容は捉えられていないが環濠集落的な要素を持つ遺跡である。市内では未だ当該期にかかる本格的な稲作関連遺跡は発見されていないが、稲作と環濠遺跡はセット関係になる事が多く、これら遺跡の出現期には既に稲作が導入、または、定着していたものと考えられる。中期に入ると、これまで見られた様相とは異なった状況が展開する。中期前半から中頃にかけては堅



- | | | | |
|---------|-------------|-------------|------------|
| 1 深田遺跡 | 7 中里遺跡 | 13 西山ノ上遺跡 | 19 茶ノ木ノ本遺跡 |
| 2 京田遺跡 | 8 立野・大坪遺跡 | 14 亀ノ甲遺跡 | 20 アモメ遺跡 |
| 3 袴田遺跡 | 9 樋の口遺跡 | 15 平田・六反田遺跡 | 21 岩戸山古墳 |
| 4 野田遺跡 | 10 川原遺跡 | 16 西原遺跡2次 | 22 乗場古墳 |
| 5 二反田遺跡 | 11 新庄・六反田遺跡 | 17 熊野遺跡 | 23 善藏塚古墳 |
| 6 宿町遺跡 | 12 川犬古墳群 | 18 鍛冶屋遺跡 | 24 鶴見山古墳 |

第1図 深田遺跡(2～4次調査)周辺の遺跡分布図 [1/25,000]



1.深田遺跡 環濠部分 (SX-05)
2.京田遺跡3次調査

3.京田遺跡1・2次調査
4.二反田遺跡

第2図 深田遺跡 (2～4次調査) 位置図 [1/5,000]

六式住居が散発的にしか存在しないようになり、環濠のように大規模な土木工事を伴う遺構は全く確認出来ないようになる。ところが中期後半になると、六反田遺跡のように大規模な集落域と墳墓域がセットになって出現するなど、再び大規模な土木工事を伴うべき大集落形成の萌芽が見られるようになる。また、前述した立野・大坪遺跡などから鉄器が出土するようになるなど、その普及と前後し、変化の著しい時代様相の到来が看取出来る。後期に入ると、各地で大規模な集落が形成されるようになる。室岡地区に所在する野口遺跡や道添遺跡、室岡工業団地内遺跡では鉄器や砥石が出土している。矢部川に面した南部地区では、現在のところ大規模集落は発見されていないが、アモメ遺跡では非常に密集度の高い貯蔵穴群が発見されており、近くには墳墓群も存在することから、近接した区域に大規模な集落が存在するものと思われる。また、同地区内に所在する茶ノ木ノ本遺跡の甕棺墓群からは方格規矩鏡、深樋式銅剣、鉄戈が出土しており、これらの事象は在地有力者の台頭と共に、大規模集落同士の統合が進んでいる事を連想させる。

これと時をほぼ同じくして室岡台地上に所在する亀ノ甲・山ノ上周辺においても土地利用が再開し、地形を人為的に開削し前代とは比較にならない程の大環濠集落を形成する。西山ノ上遺跡や国道442号線バイパス建設関係の遺跡群がこれに該当し、特に前者においては原始鍛冶の痕跡とともに多量の鉄片、大陸由来の鑄造鉄斧片などの当時最先端の鉄素材が多量に出土するなど、一気に弥生時代における全盛期を迎える。しかしながら、西山ノ上遺跡が見せるように後期後半～末頃にかけて鉄素材を投棄したり、居住域を大幅に縮小する傾向が見られる。原因は定かでないが、瀬戸内地区で多く見られる高地性集落の発生時期と重なるところもあり、注意すべき点と思われる。

古墳時代に入ると、地域的な隔たりはあるものの、北部丘陵上（以下、八女丘陵）では4世紀前半頃から5世紀前半にかけて方形周溝墓や小円墳が造られるようになる。辻の西遺跡（1・2次調査）や立山山古墳群がこれに挙げられ、比較的小さな墓域の中で造墓活動を行っている事がわかる。5世紀前半になると八女丘陵上に大規模な古墳が次々に築造される。所謂、筑紫君一族が築いた八女古墳群であり、その初現は広川町所在の石人山古墳（108m）である。内部主体たる初期横穴式石室には直弧文を浮き彫りした家形石棺が納められており、最古級の装飾古墳としても知られる。5世紀後半代になると八女古墳群から大型前方後円墳は姿を消す。しかし、これを補完するように瑞王寺古墳（直径26m 円墳）、欠塚古墳（墳丘長45m 前方後円墳）、本6号墳（直径41m 円墳）、釘崎2号古墳（墳丘長約47m 前方後円墳）、丸山古墳（墳丘長55m 前方後円墳）等の古墳が次々に築造される。しかし、50m前後の中規模から逸脱しない点に、首長墓系列の一時的な不在を読み取る事が出来る。6世紀前半～中頃になると、筑紫君全盛期を築いた磐井が築造した岩戸山古墳（墳丘長約135m 前方後円墳）が出現する。日本書紀等にある磐井の乱後は、それまで単一的に連なっていた首長墓系譜が岩戸山以後は乗場古墳（墳丘長約70m 前方後円墳）、善蔵塚古墳（墳丘長約90m 前方後円墳）、鶴見山古墳（墳丘長87.5m 前方後円墳）など、複数の大型前方後円墳が出現し、首長系列の複数化を暗示している。6世紀後半代になると直径10m前後の小円墳が爆発的に増加すると共に、後半～末頃には前方後円墳は完全に姿を消し、童男山古墳（直径48m 円墳）などの大型円墳が出現する。しかし、7世紀初頭以後、これらの古墳に後続する大型古墳は全く見当たらず、歩調を合わせるかのように後期群集墳も姿を急速に消してゆく。これらの現象を最後として、八女古墳群は終焉を迎える事となる。

3 調査の内容

発掘調査の概要

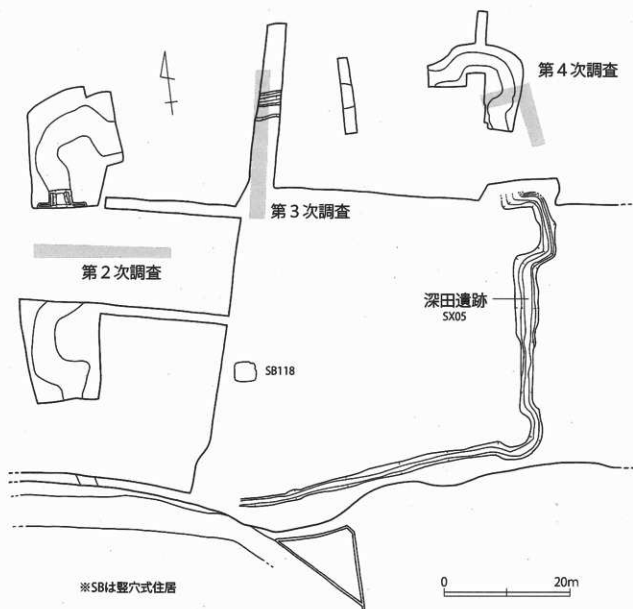
深田遺跡は八女南部第2ほ場整備事業に伴う事前発掘調査により発見された遺跡で、その名の由来となっている小字、深田と京田の小字境にある。

遺跡検出の段階で多数の竪穴式住居と共に平面プランが長方形気味の大きな環濠状の溝が調査区内に巡っている事が判明していた。掘削を開始して間もなく、溝は環濠となる事が想定され、北東及び南東のコーナーと短辺側中央には「コ」の字形の張り出し部分が存在している事が明確となった。調査が進むにつれ、多数検出された竪穴式住居は多くが弥生時代後期と奈良期を中心とした建物群である事が判明し、溝については全周する環濠（SX-05）で、時期は古墳時代前半期のものである事が判明した。環濠内埋土からは古墳時代の古式土師器が出土するものの、土器以外の特殊遺物は出土しなかった。その後、調査対象地域外に延びているSX-05の規模を確認するため、ほ場整備事業関係者承諾のもと周辺にトレンチを設定し確認調査を行い、四隅及び短辺中央に各1箇所づつ張り出し部分をもつ遺構である事が明確となった。

同様の形態を有する遺構は佐賀県・吉野ケ里遺跡や群馬県・三ツ寺遺跡等において確認されており、また、時期的に接近する遺跡として大分県日田市・小迫辻原遺跡等がある事を鑑み、深田遺跡内のSX-05については古墳時代前期の豪族居館として認識された。しかしながら、深田遺跡のSX-05には三ツ寺遺跡で確認されたような祭祀遺構や生産遺構が発見されず、それに伴う遺物や痕跡すら見つからないことから「豪族居館」との呼称に若干の違和感があった事は否めなかった。

その後、平成20年代に入り深田遺跡の史跡公園計画が浮上し、計画策定に係り八女市文化財専門委員会に助言を仰いだところ、部分的な再調査を行い造営時期と遺構（SX-05）の態様を明確化すべきとの指導を受けた。本指導に基づき、平成21年度に2次調査を実施し、平成23年度には4次調査を終了させ本報告に至る事となった。

以下においては、各次調査の結果について報告を行う。なお、遺構番号については1次調査から続く番号を付与している。なお、遺跡全体の詳細については八女市文化財調査報告書第71集を参照されたい。



第3図 深田遺跡 SX-05 全体図、及び、
2次調査～4次調査地点位置図 [S = 1 / 600]

〔第2次調査〕

A 2次調査

2次調査は主に突出部を除く短辺部分の西端部を捉え、遺構内における詳細な堆積状況の観察及びそれに伴う出土遺物の把握を目的とした。堆積土の状況については前次調査と比較し精度の高い情報が入手出来たものの、全体的に遺物の出土量が少ない遺跡でもあり、今次調査では土器を含む遺物の発見には全く恵まれなかった。

なお、本調査は保存に第一主眼を置いた確認目的の調査であるため、SX-05を除いた遺構については基本的に掘削調査を行っていない。従って、各遺構の時期判定については切り合い関係等の事象による相対的な時期判定以外は、推定された時期判定としている事については了承頂きたい。

以下、今次調査に係る事実部分についてのみ言及し、全体像については後述する。

遺構と出土遺物

今次調査区は環濠全体から見れば西辺中央部よりやや北寄りに設定しており、西辺にある北側突出部と中央突出部の中間程に位置する。長さ22m、幅2.2m、面積48.4㎡の規模で調査を行った。検出した遺構は環濠部分であるSX-05の他、土壌5基、溝1条、ピット22個を確認した。

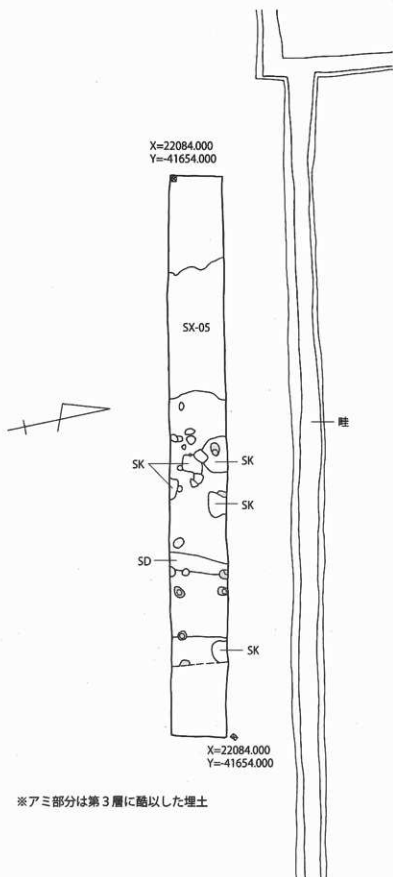
SX-05（環濠） 〈第4・5図〉

トレンチ設定区において検出したSX-05の幅は広義で6m、狭義で4.6mを測る。これはトレンチ南側土層断面の観察により導き出した数値であり、広義では西側端部の立ち上がりを2層に求め、狭義では6層に求めた。東側端部においては両者とも12層に求めている。

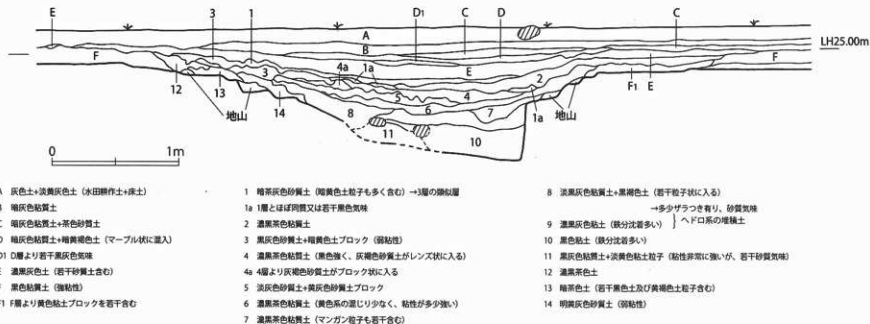
土層の堆積状況からSX-05掘削時の旧地表土、または、当時の基盤土はF層であると考えられるが、このF層から濠底部までの深さは1.2mを測る。

濠の断面形はやや特異な形状を成している。濠の外側は浅い落ち込みから1.3mのフラットを経て水平面に対し26°の斜度を持つ傾斜面があり、その後83°の急角度をもって濠底部に至る。濠の内側においては外側と比較し対照的な形状をとっており、2.2mもの長い距離をもって濠底部に到達している。その角度は水平面に対し20°と非常にゆったりとした傾斜面となっている。濠底部は内側が外側に対しやや高くなっており、水平面に対し8°の傾斜角を有している。

次に流入土の堆積状況を観察すると、堆積土はA種（黄色土系：3・5・14層）、B種（暗灰色土系：8・11・13層）、C種（A種+B種：1・1a層）、D種（黒色土系：2・4・4a・6・7・9・10・12層）の4種に大別出来る。A種は更に2種に小区分でき、3・5層はSX-05が埋没する直前の堆積土と思われ、14層は埋没開始直後のものと思われる。B種は埋没開始直後の流入土、C種はSX-05が付託されていた機能を失った完全埋没時の流入土で、D種は埋没開始直後から中位付近まで没する時期までの流入土と考えられる。特に10層・14層は注意を要する層で、10層は鉄分の沈着が非常に多い黒色の粘土で構成されており、状況から比較的長い時間をかけて埋没している事が分かる。また、濠底面から30cmもの厚みが単独層であり、逆説的に言えばSX-05が築造当初に付託された機能も、築造直後から掘り直し等の改修を受けずに長期間放置されている事になる。14層はF層以下にある基盤土に酷似しており、SX-05の掘削時に出た排出土を一部内側に積み上げた痕跡を示している可能性が高い。但し、流入土の絶対量が少ないことから、土塁状の施設ではなく濠内側の平坦面を整地するための薄い盛土状の施設と思われる。濠底面には直径20cm程度の円礫が複数転落しており、これらの円礫は整地面と濠の境に境界標



第4図 深田遺跡2次調査 遺構配置図 [S=1/100]



第5図 深田遺跡2次調査 SX-05 南側土層断面図 (S=1/30)

的に並べられていたものと考えたい。

SK（土壌） 〈第4図〉

調査区内で5基を検出した。全てSX-05の内側にあり、濠の外側では確認出来ていない。大半のものはピットに切られており、その中にはSX-05の埋土と同色・同質のピットも含まれる。全て未掘なため、時期については判然としないが、SX-05が完全に埋没する以前の所産と思われる。

SP（ピット） 〈第4図〉

調査区内で22個を検出した。SKとの切り合い関係や濠の外側では検出されていない事などから、大半のピットはSX-05が機能した以前、または、機能していた時期に属すると思われる。

検出された22個の中にはSX-05の3層に酷似した埋土をもつものが7個ある。直線上に並ぶもの、直角・等間隔となっているもの、ピットが接近しているもの、柱痕跡を有するもの等があり、SX-05埋没時期において濠縁辺部分に掘立柱建物が配置されている事を想起させる。特に東側の5個に関しては並列状況が濠の軸線と同方向となっており、SX-05が機能的に健在であった頃に建てられた建物である可能性が高い。一部はピットが接近しており、建て替え行為が存在していた可能性があり注意を要する。

SD（溝） 〈第4図〉

調査区中央付近で検出した溝。北東～南西方向へ流路を持つ。出土遺物はなく時期判定は困難であるが、遺構にかかるピットの全てに切られている事からSX-05より古くなる可能性が残る。

第1次調査時の範囲確認において近隣のトレンチ内では検出されていない事から、長く連続した遺構ではなく、区画に主眼を置いた非連続の遺構である可能性もある。

〔第 3 次調査〕

B 3次調査

3次調査は主に突出部を除く長辺部分の北端部を捉え、2次調査と同じく詳細な堆積状況の観察及びそれに伴う出土遺物の把握を目的とした。また、調査部分の位置確認のため1次調査時において掘削調査を行った部分も一部再掘削を行った。従って、今次調査で出土した土器には1次調査終了後の埋め戻し土に含まれていた遺物があるため、遺物実測図に「埋め戻し土中」との標記を加えている。

以下、今次調査に係る事実部分についてのみ言及し、全体像については後述する。

遺構と出土遺物

今次調査区は環濠全体から見れば北辺中央部に設定しており、1次調査時に範囲確認のため北辺中央部付近から北へ25mのトレンチを設定した部分をトレースしている。長さ23.6m、幅2.0m、面積47.2㎡の規模で調査を行った。検出した遺構は環濠部分であるSX-05の他、新たにピット8個を確認した。

SX-05（環濠） 〈第6・7図〉

トレンチ設定区において検出したSX-05の幅は推定5.4mを測る。これはトレンチ西側土層断面の観察により導き出した数値であり、北側端部の立ち上がりをもⅡ-4層（一部推定）に求め、南側端部においてはⅢ-1層に求めている。土層の堆積状況からSX-05掘削時の基盤土はⅣ層であると考えられるが、このⅣ層から濠底部までの深さは1.35mを測る。

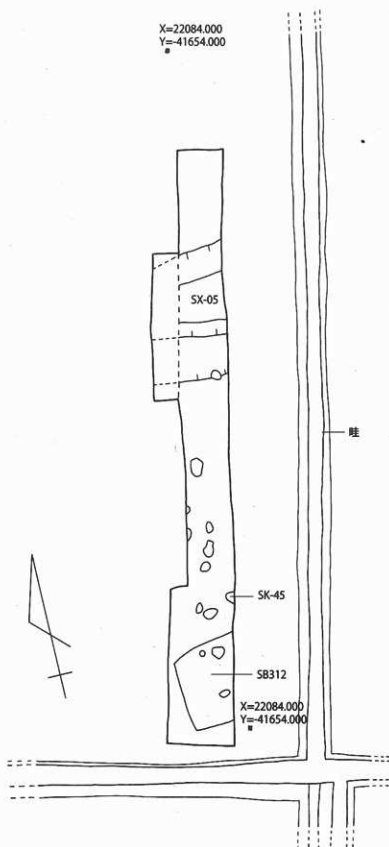
濠の断面形は2次調査時の状況とほぼ同じであるが、濠の外側は水平面に対し12°の斜度を持つ傾斜面が推定1.2mあり、その後70°の急角度をもって濠底部に至る。濠の内側においては2.2mの距離をもって濠底部に到達している。その角度は水平面に対し30°となっており、2次調査時と比較して若干急な傾斜面となっている。濠底部は内側が外側に対しやや高くなっており、水平面に対し8°の傾斜角を有している。濠底面の幅は約1.9mを測る。

次に流入土の堆積状況を観察すると、堆積土はⅠ層（表土）、Ⅱ層（流入土）、Ⅲ層（氾濫流入土）、Ⅳ層（基盤土）の4層に大別出来る。Ⅲ層は埋没開始直後の氾濫土流入、Ⅰ層はSX-05が付託されていた機能を失った完全埋没時の流入土で、Ⅱ層は埋没開始直後からほぼ没する時期までの流入土と考えられる。特にⅢ層は注意を要する層で、ごく初期の流入土と考えられるⅡ-7層が入った後に一気に流入してきた層で、10cm～20cmの円礫を多く含んでいる状況から、水流作用が影響して埋没している可能性がある。この流入の後にⅡ層の堆積が始まるが、Ⅱ-6層のように単独層で比較の厚みのある強粘性の土層があり、それより上位の層位に掘削の痕跡等が見られない事は、2次調査の結果と同様、SX-05が築造当初に付託された機能も、築造直後から掘り直し等の改修を受けずに長期間放置されている事になる。しかしながら、これが自然要因に起因しているか否かの判断は本稿では出来ない。

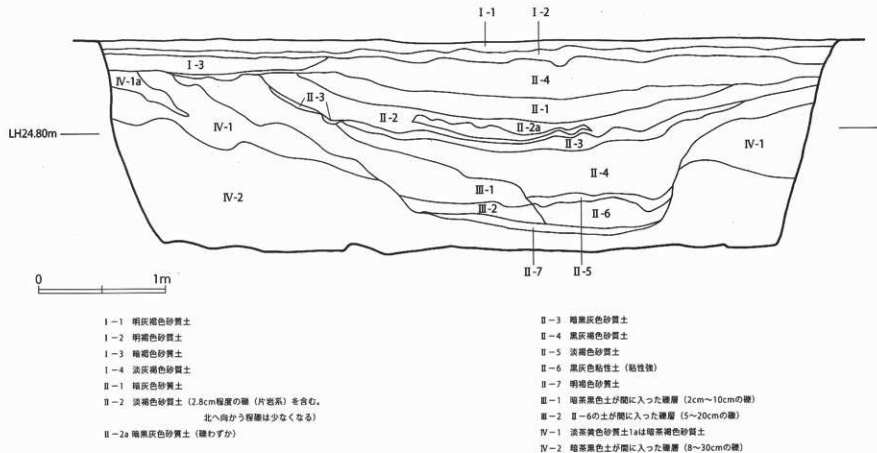
今次調査では2次調査時の14層のような基盤土に酷似した明確な流入土は検出されておらず、SX-05の内側に掘削土を積み上げた痕跡は見当たらないが、かろうじて、Ⅱ-7層がこれに該当する可能性が残っている。

SP（ピット） 〈第6図〉

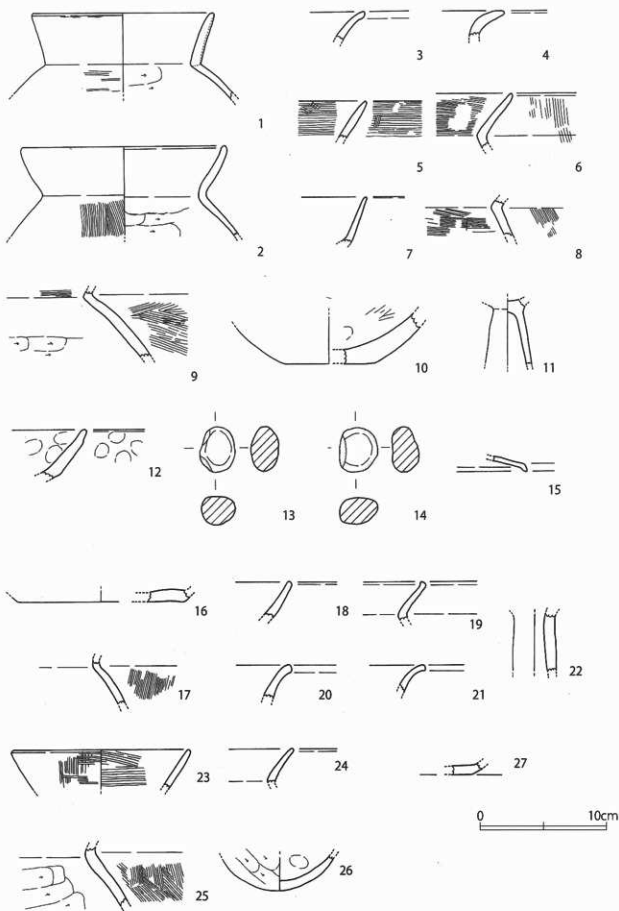
調査区内で新たに8個を検出した。全て保存目的のため未掘で、検出状況のみ記録保存を行った。しかしながら2次調査同様、濠の外側では検出されておらず、また、1次調査では確認されていなかった新規のピットが検出された事は成果として挙げたい。



第6図 深田遺跡3次調査 遺構配置図 (S=1/100)



第7図 深田遺跡3次調査 SX-05 西側土層断面図 (S=1/30)



第8図 深田遺跡3次調査 SX-05、SK-45 出土遺物実測図 [S=1/3]

SX-05 出土遺物〈第8図〉 (3次調査分)

出土遺物は、遺跡埋め戻し土中(1~15)とSX-05に伴うもの(16~26)、SK-45に伴うもの、に分かれている。

1~6・7は甕形土器。1・2は口縁部~肩部の破片で、1は口縁部が直線的に外反し端部を丸くおさめ、肩部内面はヘラケズリにより鋭い陵をもつ。2は口縁部がやや内湾し、肩部内面は指オサエで段を形成する。5・6の外表面は縦方向のハケ調整の後、目の細い横ハケを施している。7は二重口縁壺の口縁部破片か。9・10は壺形土器。9は肩部~胴部破片で、内面の陵から4cmはナデ、以下は反時計回りのケズリ。内面には粘土紐の接合面が明瞭に見られる。11は高坏の脚部で、やや短脚でエンタシス状を成す。12は小型で鉢形を成すミニチュア土器。13・14は小円礫で、13の擦痕面には赤色顔料が貫入しており、顔料の細粉末化に使用されたものと考えられる。15は須恵器坏蓋で、小田編年Ⅶ期に相当する。

16は土師器坏身または皿の底部破片で、底部はヘラ切りか。17~21・23・24は甕形土器。17は肩部~胴部破片。小型の長胴甕か。19は端部を内面肥厚させ、胎土に片岩粒子が見られず長石粒子が目立ち、在地の粘土ではない。22は高坏脚部で、僅かにエンタシス状のふくらみを持つ。25は甕形と思われる肩部~胴部破片で、胴部内面は時計回りのヘラケズリを施し、肩部内面には指オサエで段を形成する。26は甕または壺の底部破片で、放射状のヘラケズリで丸底化している。内面は指オサエ。27は甕または壺の底部破片。陵がやや甘い平底を成す。

〔第 4 次調査〕

C 4次調査

4次調査は、主にこれまで未確認であった北辺側の突出部内における詳細な堆積状況の観察及びそれに伴う出土遺物の把握を目的とした。今次までの成果の通り、全体的に遺物の出土量が少ない遺跡でもあり、今次調査においても遺物の出土にはあまり恵まれなかった。しかしながら、埋土上層ではあったものの、鉄器鍛打の際に発生する杓形滓が出土した事は大きな成果であった。

なお、2・3次調査同様、今次調査においても保存に第一主眼を置いた確認目的の調査であるため、SX-05を除いた遺構については基本的に掘削調査を行っていない。従って、各遺構の時期判定については切り合い関係等の事象による相対的な時期判定以外は、推定された時期判定としている事については了承頂きたい。以下、調査に係る事実部分についてのみ言及し、全体像については後述する。

遺構と出土遺物

今次調査区は環濠全体から見れば北辺の北東隅部に設定しており、北東突出部の南半分、及び、その周辺に位置する。形状はL字形とし、総延長16.5m、幅2.3m、面積37.9㎡の規模で調査を行った。検出した遺構は環濠部分であるSX-05の他、土壌1基、ピット5個を確認した。

SX-05（環濠） 〈第9・10図〉

トレンチ設定区において検出したSX-05の幅は3mを測る。これはトレンチ南側土層断面の観察により導き出した数値であり、東側端部の立ち上がりを3層に求めた。西側端部においては基盤土の立ち上がりに求めている。検出された現基盤土上面から濠底部までの深さは0.9mを測る。

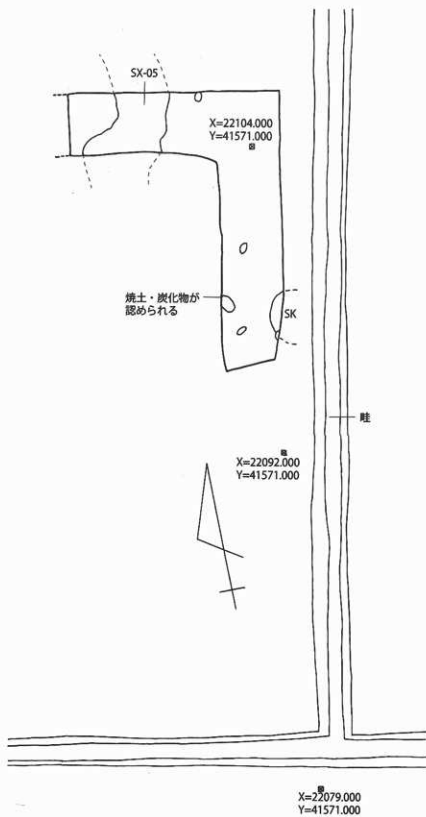
濠の断面形は匙状を成している。濠の外側は急角度で落ち、水平面に対し56°の斜度を持つ傾斜面があり濠底部に至る。濠の内側においては、水平面に対し56°、深さ0.4mの落ち込みから1.16mのフラットを経て水平面に対し50°の傾斜面があり濠底部に至る。濠底部は内側が外側に対しやや高くなっており、水平面に対し9°の傾斜角を有している。濠底面幅は土層断面図上で0.66mを測る。

次に流入土の堆積状況を観察すると、堆積土はA層（1層）、B層（2・3・4層）、C層（6・7・10層）、D層（5・8・9・13層）、E層（11・12層）の5層に大別出来る。A層は完全埋没直後の層と思われる、埋没後の整地層と思われる。B層はSX-05が機能を失う最終段階の流入土と思われる、やや早いスピードで埋没している。4層の深部には円礫が一部集中しており、水流が作用している可能性がある。C層は比較的ゆっくり濠の外側から埋没した過程を示しており、礫が見られず粘質土を主体としている。6層からは焼土粒子と思われる茶褐色粒子や炭化物も見られることから、濠外側の直近に熱源を必要とする施設が存在している事を示唆している。D層は埋没開始直後の流入土と考えられ、10cm程度の円礫が多く見られ、SX-05掘削時の排出時流入と考えられる。この事象については2次調査の成果と同様である。E層である11・12層は、本来SX-05の底面と考えられる5層の直下であり、基盤土を掘り込んでいるため、SX-05掘削時以前の構築物（ピット？）の痕跡と考えたい。但し、出土遺物がなく土層断面のみの情報であるため、現時点では即断は出来ない。

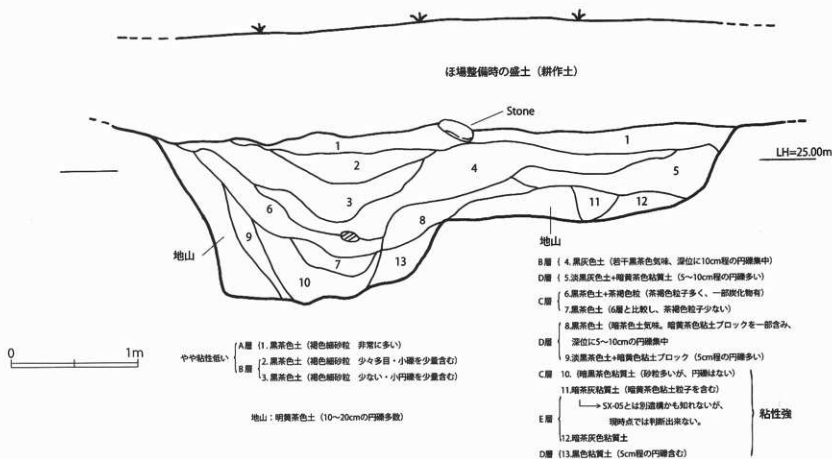
なお、今次調査地点の基盤土（地山）は、10～20cmの円礫を多数含む明黄茶色土であった。

SK（土壌） 〈第9図〉

調査区内で1基を検出した。SX-05の外側において検出したものであるが、掘削を伴わない調査を目的としているため、出土遺物等はない。現状では、直径2m程度の円形土壌となるものと思われる。



第9図 深田遺跡4次調査 遺構配置図 [S=1/100]



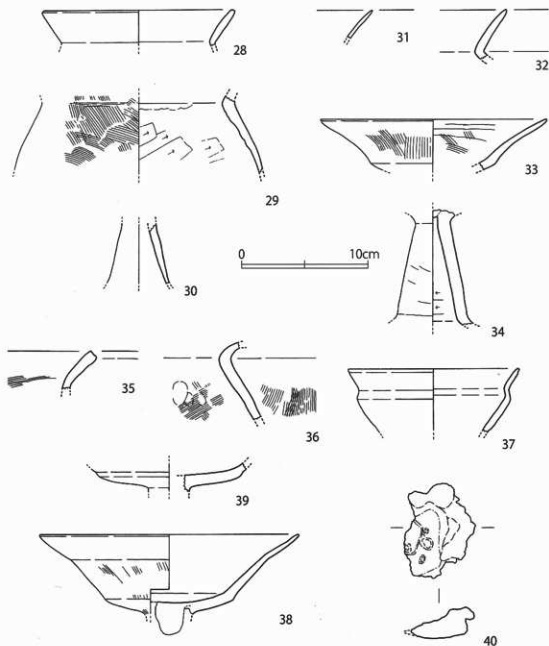
第10図 深田遺跡4次調査 SX-05 南側土層断面図 [S=1/30]

SP (ビット) 〈第9図〉

調査区内で5個を検出した。中には検出断面に焼土及び炭化物が認められるものもあり、SX-05 上層から出土した埴形滓との関連が注目される。時期等の詳細は未掘であるため不明である。

SX-05 出土遺物〈第11図〉 (4次調査分)

28～34はA層(「黒色土中」を含む)出土遺物。28・29・31・32は埴形土器の破片で、29は内面に荒いケズリ、頸部内面に粘土紐接合痕を明瞭に残す。30・33・34は高坏の破片で、30の外表面は横方向のハケ、34は脚端が急角度で屈曲している。35～39はB層出土遺物で、35・36は埴形土器の破片、37は小型の鉢形。38・39は高坏の受け部。高坏は全て胎土が精製されている。40は埴形滓で、図右から左に向かい傾斜を持つ。底部には鍛造剥片や粒状滓が見られる。



第11図 深田遺跡4次調査 SX-05 出土遺物実測図 [S=1/3]

押印	番号	実測 番号	出土遺構	種 別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調整 (外面、内面)	色調、胎土、焼成	備 考
8 図	1	R-19	SX-05埋戻土中	土師器	甕形	14			外横ハケ、内ケズリ	淡黄褐色、片岩粒子他あり、 やや良好	
"	2	R-16	SX-05埋戻土中	"	壺形	16			外縦ハケ、内ケズリ	暗黄茶褐色、片岩・石英粒あり、 やや良好	
"	3	R-20	SX-05埋戻土中	"	甕形				横ナデ	茶褐色、精製、やや良好	口縁部破片
"	4	R-13	SX-05埋戻土中	"	甕形?				不明	淡黄茶褐色、精製、やや良好	口縁部破片
"	5	R-10	SX-05埋戻土中	"	甕形				横ハケ	暗茶褐色、精製、やや良好	口縁部破片
"	6	R-17	SX-05埋戻土中	"	甕形				外縦ハケ、内横ハケ	淡茶褐色、片岩粒あり、 やや良好	口縁部破片
"	7	R-7	SX-05埋戻土中	"	甕形?				ナデ	淡黄褐色、精製、やや良好	口縁部破片
"	8	R-18	SX-05埋戻土中	"	甕形?				ハケ	淡茶褐色、片岩粒あり、 やや良好	頸部破片
"	9	R-22	SX-05埋戻土中	"	甕形?				外横ハケ、内ケズリ	黄茶褐色、精製、やや良好	肩部破片
"	10	R-11	SX-05埋戻土中	弥生式土器	甕形		7		ハケ?	淡茶褐色、片岩粒多い、 やや良好	
"	11	R-21	SX-05埋戻土中	土師器	高杯				不明	明茶色、精製、やや良好	
"	12	R-25	SX-05埋戻土中	手づくね	鉢形?				指オサエ	茶褐色、片岩粒少量あり、 やや良好	口縁部破片
"	13	R-26	SX-05埋戻土中	小円罐		長3.5	幅2.7	厚2.2			重量29.4g
"	14	R-27	SX-05埋戻土中	小円罐		長3.5	幅3.0	厚2.1			重量30.8g
"	15	R-24	SX-05埋戻土中	須恵器	坏蓋				不明	淡白褐色、精製、やや不良	
"	16	R-9	SX-05上層	土師器	皿?		13		不明	淡茶褐色、精製、やや良好	
"	17	R-15	SX-05 II-4層	土師器	甕形?				外縦ハケ、内ナデ	茶褐色、片岩粒少量あり、 やや良好	
"	18	R-6	SX-05 II-4層	土師器	甕形				横ナデ	淡茶褐色、精製、やや良好	
"	19	R-2	SX-05 II-4層	土師器	甕形				横ナデ	黄茶褐色、精製、やや良好	
"	20	R-3	SX-05 II-4層	土師器	甕形				横ナデ	茶褐色、精製、やや良好	脚部破片
"	21	R-5	SX-05 II-4層	土師器	甕形				ナデ?	茶褐色、片岩粒少量あり、 やや良好	
"	22	R-4	SX-05 II-4層	土師器	高杯				横ナデ	暗茶褐色、精製、やや良好	
"	23	R-12	SX-05 II-6層	土師器	甕形	14			不定方向のハケ	淡茶褐色、片岩粒少量、 やや良好	
"	24	R-8	SX-05 II-6層	土師器	甕形				横ナデ	黄茶褐色、片岩粒あり、 やや良好	
"	25	R-14	SX-05 II-6層	土師器	甕形?				外ハケ、内横ケズリ	暗茶褐色、片岩粒あり、 やや良好	
"	26	R-23	SX-05 II-6層	土師器	甕又は甕形				外ケズリ、内指オサエ	暗黄茶褐色、片岩粒多い、 やや良好	
"	27	R-1	SK-45	弥生式土器?	甕又は甕形				ナデ?	黄茶褐色、精製、やや良好	
9 図	28	R-3	SX-05 A層	土師器	甕形	16			横ナデ	淡黄茶色、片岩・石英粒多い、 良好	
"	29	R-2	SX-05 A層	土師器	甕形				外ハケ、内ケズリ	茶褐色、片岩粒多い、良好	
"	30	R-5	SX-05 A層	土師器	高杯				横ナデ?	茶褐色、片岩粒多い、良好	
"	31	R-11	SX-05 A層	土師器	甕形				ナデ?	淡黄褐色、片岩細砂粒あり、 良好	
"	32	R-10	SX-05 A層	土師器	甕形				横ナデ?	淡黄茶色、片岩・赤色粒子多い、 良好	
"	33	R-9	SX-05 A層	土師器	高杯	18.4			ハケ後ナデ	淡黄褐色、片岩・赤色粒子多い、 良好	
"	34	R-1	SX-05 A層 No.2	土師器	高杯				外ナデ、内ケズリ	淡黄茶色、片岩砂粒多い、良好	
"	35	R-8	SX-05 B層	土師器	甕形				ハケ後ナデ	茶灰色、片岩粒多い、良好	
"	36	R-7	SX-05 B層	土師器	甕形				外ハケ、内指オサエ	茶灰色、片岩・石英・ 角閃石粒子多い、良好	
"	37	R-6	SX-05 B層	土師器	鉢形	14			不明	黄褐色、片岩・赤色粒子多い、 良好	
"	38	R-12	SX-05 B層 No.1	土師器	高杯	21.3			ハケ後ナデ	淡黄茶色、片岩・赤色粒子多い、 良好	
"	39	R-4	SX-05 B層 No.4	土師器	高杯				ナデ・ハケ	黄褐色、片岩・石英砂粒含む、 良好	
"	40	R-13	SX-05 A層		鉄滓						

第 1 表 出土遺物観察表

4 まとめ

深田遺跡のSX-05は、平成3年度の発見当初から4世紀前半頃の「豪族居館」との性格付けがなされ、今日でも通称としても使用され続けている。ところが近年になって豪族居館に対する再検証が行われるようになり、濠で囲まれた遺構部分のみを抽出して「居館」たる名称を付加する事に慎重にならざるを得ない、という状況となっている。

深田遺跡はこれまで、濠の平面形のみで遺跡の性格が決定づけられている感があった。後世に大規模な削平があったものと考えられ、遺跡そのものの検証が十分に出来ない状況であり、やむを得ない部分でもあった。しかしながら、本遺跡は八女の歴史、或は、八女古墳群造営に至るまでの歴史を認識するために重要な遺跡であり、筑紫君一族の台頭を考える上でも再検討が必要不可欠であった。

第1次調査で把握しきれなかった部分について補足するため、平成21年度から同23年度までの3年間、ごく限定的ではあるが2次～4次にわたる追加調査を行った上で深田遺跡の周辺地域に所在する同時代前後の遺跡を概観しながら、当該遺跡の本来の姿について考察してみたい。

1 SX-05（環濠）の埋没過程について

SX-05の断面形状は、基本的に内側の傾斜が緩やかで外側は急傾斜となっている。濠の内側斜面は概ね $20^{\circ} \sim 30^{\circ}$ の傾斜角をもって底面に向かい、濠底面は内側から外側に向け概ね 8° の傾斜をもって下降気味となっている。外側斜面は水平面から $60^{\circ} \sim 80^{\circ}$ の立ち上がりをもち、急な傾斜面を経て外側端部に至る。

各土層面の観察から、埋没は主に内部側から始まっている。初期流入土として黒茶色または黒灰色系の土が円礫を伴って堆積していく。その直後に黄褐色系の土が一部円礫を伴いながら比較的薄く堆積する。この黄褐色系の土は基盤土に酷似しており、濠を掘り下げる過程で排出された土砂の一部がSX-05内部に持ち込まれ、凹凸を無くす整地土として使用されたと考えられる。また、同時に検出された円礫については、その絶対数の少なさから濠と整地面の境部分に並べられた石材の一部と考えたい。調査地点により異なるが、その後は濠内外から流入し堆積してゆけど、概ね前半は粘質土の存在が示すようにゆっくり埋まり、後半は砂質土を伴いつつやや早い速度で埋まっている。これは水流が作用している可能性が考えられる。濠が完全に埋まる時期は、出土遺物から古墳時代前期後半～中期初頭頃と思われるが、最終未流入土、すなわちSX-05最上層の堆積土は黒灰色系の砂質土で、濠の痕跡を無くすかのように厚みを持った均質な土で占められていることから、該期に周辺を含めた整地が行われた可能性もある。

2 深田遺跡及び京田遺跡（1・2次）の出土遺物について

深田遺跡及び京田遺跡（1・2次）からの出土遺物については八女市文化財調査報告書第71集・V章出土遺物に 檀 佳克 氏により詳述されている。氏はこれら土器群を奈良期を含め8期に分類し、特に深田遺跡の周辺に展開する京田遺跡出土土器と住居形態を勘案しつつ、次期区分に遺跡名を冠し京田1期～京田4期を設定し、深田遺跡のSX-05出土土器とも絡め両遺跡における住居群の変遷と環濠との関係を説いている。内容の詳細は前述資料に依って頂きたいが、概略を記すと以下の通りとなる。

「京田1期」

伝統的な在来土器が大半を占め、弥生時代後期～終末期に該当する。底部形態によりa・bの2期に小区分される。

「京田2期」

これまでの在来系土器群に外来系が見られるようになる。底部形態に平底が残るが、在来系土器の長胴甕が丸底化する。外来系土器群（近畿第Ⅴ様式変容系土器群）として短胴の甕が見られる。古墳時代初頭に位置づけられる。

「京田3期」

布留式系の土器群が見られるようになり、次第に主体となっていく。甕の短胴化が前時期と比べ更に進む。庄内式系と布留式系が見られるようになるa期（古墳時代前期前半）と、布留式系が主体となる時期のb期（古墳時代前期中頃）の2時期に小区分される。

「京田4期」

典型的な布留式系の各器種が定着、主体化する。山陰系の土器群がこの頃から散見されるようになる。古墳時代前期後半に位置づけられる。

深田遺跡2～4次調査においては、3・4次調査で少ないながらも出土遺物が見られた。それらの出土位置は濠の中位～上位であり、土器は京田3b期に該当するものが中心であった。

これらから、深田遺跡SX-05の埋没は氏の説かれる通り京田3期には埋没が既に始まっており、次の京田4期にはほぼ完全に埋まっていると思われる。しかしながら、4次調査において埋没の最終段階に近い上層の黒色土中から埴形滓（鉄滓）が出土している事は重要で、3b期～4期にかけての時期にはSX-05直近の竅穴式住居は見られない事から、当該鉄滓が北東部の突出部内外付近で発生した可能性を示唆している。これはSX-05が埋没直前まで機能していたとも考えられ、当該遺構の存在意義を考える上で重要な提案を投げかけている。

3 SX-05（環濠）の構造と付与機能について

深田遺跡で検出されたSX-05（環濠）は主軸をほぼ東西方向にとるやや横長の方形環濠で、各コーナー、及び、東西の短辺部分中央に各1カ所の方形状の突出部を有している。規模は突出部を含んで東西方向に86m、南北方向で66.5mを測り、突出部を含めない環濠内側の規模は東西方向で70m、南北方向で60mを測る。この規模は、発見された当時において古墳時代前期に属するいわゆる「豪族居館」単体遺構としては西日本最大級のものとして評価された。

しかし近年の各種論考において、群馬県・三ツ寺遺跡を中心的な指標として来た遺構単体での「豪族居館」とした性格付に対する「居館」遺構への再検討が活発化してきており、深田遺跡においても再検討が必要な時期に来ているものと考えられた。

深田遺跡のSX-05は平成3年度の発見当初から「豪族居館」と認識されていたが、これは主に環濠部分の突出部を含むその平面形のみでの判断に由来しているものと思われる。しかしながら、近年の発掘調査の成果は目覚ましく、畿内周辺を中心に全国各地で「居館」発見例が増加している。その中で多様な類型が設定されるようになり、居館の在り方について様々な見解が出されている。寺沢薫氏は「一般成員からの政治的な空間的独立や隔絶性」において評価・分類が行われ、辰田和弘氏は「祭祀空間である」ハレの空間の存在に豪族居館としての評価を与えるべき」とされている。また都出比呂志氏は一般構成員との隔絶性の中で大型の区画施設や祭祀遺構の存在とともに、大型高床倉庫群の在り方から、そこに首長層と一般層との階層差をダイレクトに示す租税の存在を説いている。

これらを踏まえた上で深田遺跡のSX-05を再検討してみると、SX-05が存続していた時期における一般集落は100m前後の距離を保った状態で展開しており、一種の隔絶性は見て取れる。

平成3年度の1次調査では、環濠内の状況や遺物の出土状況を見ても濠以外の区画施設や祭祀関連遺構、大型建物等の存在は確認出来ず、濠内堆積土中にもそれらの存在を示唆する痕跡も認められなかった。しかしながら、2次調査において上層の堆積土と同質の埋土を有するピットが複数確認出来、それらが建造物を思わせる配置状況をとっている点や、4次調査において椀形の鉄鐙の出土から直近に生産的施設が存在する可能性が考えられるようになり、「居館」たる一部要件が備わるようになってきた。

濠の断面形はやや深みのある匙型を呈すが、外部からの進入を頑に拒む程の威圧感は感じられない。また、濠の内側に土塁等の痕跡はなく、基盤の掘削土による濠内平坦面の整地に用いられたと考えられる黄色土系流入土が少量確認出来たのみであり、居館としての絶対条件ではないと考えるが、防衛に関する施設は希薄である。

これらの事実を評価すれば、大規模な大型建物や祭祀行為、生産的施設が見られない反面、一般構成員からの隔絶性や濠内における整地や一部円礫を用いた装飾が施されている点を考慮すれば、首長が住まう居館であると断言は出来ないが、SX-05の付与された性格は当該地域周辺の首長層が主導して造営した、階層性を顕在化させるための一種の象徴的な施設と考えられはしないだろうか。

4 深田遺跡と他地域との比較

弥生時代後期～終末にかけて九州地方においても半円形、または、方形の突出部を持った環濠が出現するようになる。これらは中国都城の影響を受けて成立したものと考えられており、分布の中心が有明海から筑後川水系にある事から蒲原宏行氏は「有明型環濠（集落）」とされ、佐賀県吉野ヶ里遺跡を典型とし惣座遺跡・榎木遺跡・松原遺跡、福岡県道蔵遺跡・中里遺跡、大分県小迫辻原遺跡例を指摘している。

古墳時代前期になると、これらが祖系になると考えられる突出部を持つ遺跡が東北、関東、畿内で見られるが、九州でも散見される。大分県小部遺跡、熊本県西岡台遺跡、そして深田遺跡もこれに含まれる。

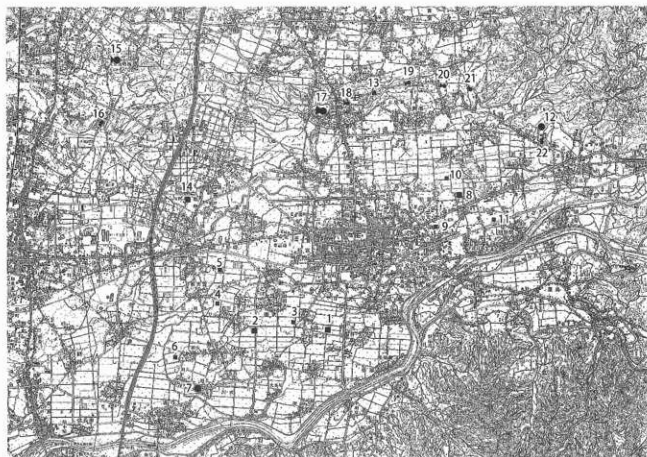
氏はこの有明型環濠を祖系として古墳時代を通じて見られる突出部を有する「豪族居館」が成立すると考えられるならば、「倭国首長連合の結成に深田遺跡の首長も深く関わった可能性」を説いている。

5 深田遺跡と周辺遺跡との相関関係

八女地方では、弥生時代中期後半～古墳時代中期初頭において活発な集落活動や造墓活動が展開されている。これらを時間軸において概観してみる。

弥生時代中期後半～後期後半

①北西部に位置する室岡遺跡群、②南西部に位置する新庄遺跡群や緒玉遺跡群、③東部に位置する納楚遺跡群や平田遺跡群がこれに該当する。それぞれの地区に中心的な集落や墳墓群が展開しており、室岡遺跡群では台地上に加茂遺跡（兵庫県）に平面形態が類似する環濠を有し、原始鍛冶が行われた西山ノ上遺跡がある。鉄器素材や銅鏡破片も出土しており、北西部の拠点集落と考えられる。緒玉遺跡群では二反田遺跡や京田遺跡等の集落群、野田遺跡、茶ノ木ノ本遺跡等の墳墓群が展開し、野田遺跡においては土壊墓から鉛矛が1口、茶ノ木ノ本遺跡からは深樋式銅剣・方格規矩鏡・鉄戈が出土している。環濠等は未検出であるが、京田遺跡等で外来系土器を含むやや特殊な遺物が多く見られる。納楚遺跡群では熊野遺跡や船底遺跡において環濠集落や大型高床式建物、それに後続する方形周溝墓群が展開する。また、平田遺跡群においては裏棺墓群に後続して方形周溝墓群が展開し、近畿系や山陰系の土器が出土している。熊野遺跡では直線に延びる大溝も検出されており、東部地域における拠点的な集落と考えられる。



- | | | |
|----------------|--------------------|--------------|
| 1 深田遺跡 | 9 熊野遺跡 | 17 岩戸山古墳 |
| 2 中里遺跡 | 10 西原遺跡2次 | 18 乗場古墳 |
| 3 袴田遺跡 | 11 津江・八升町遺跡2・3次 | 19 善蔵塚古墳 |
| 4 川原遺跡 | 12 立山山24号墳（立山山古墳群） | 20 鶴見山古墳 |
| 5 樋の口遺跡2次の旧地点 | 13 辻の西遺跡 | 21 釘崎古墳群2号古墳 |
| 6 新庄・六反田遺跡 | 14 西山ノ上遺跡 | 22 丸山古墳 |
| 7 川犬1号墳（川犬古墳群） | 15 石人山古墳 | |
| 8 平田・六反田遺跡 | 16 欠塚古墳 | |

第12図 八女市内遺跡群 遺跡位置図 [1/60,000]

弥生時代終末期～古墳時代前期後半

①の北西部エリアから遺跡が見られなくなる。西山ノ上遺跡ではその直前に鉄器素材を廃棄しており、巨大な拠点集落を放棄している事を暗示している。

②の南西部エリアでは有明型環濠のプロトタイプとも言える中里遺跡が終末期に現れる。明確な突出部はなく、前方後方形の環濠遺跡と呼ぶべき平面形を呈している。濠の断面形は逆台形を成し、後期の環濠の断面形を踏襲している。濠内側の平坦面に明確な遺構は発見されておらず、詳細な内容は不明である。

中里遺跡に後続する形で深田遺跡が古墳時代前期前半に出現する。周囲に京田遺跡他の集落遺跡を伴うが、僅かに一部集落が先行している点は気にかかる。

当該時期、深田を中心とした半径1km内に樋の口遺跡（2次）、袴田遺跡、川原遺跡、新庄・六反田遺跡等が存在しており、樋の口2次、袴田、川原遺跡は8m×8m前後の該期としては規模の大きな竪穴式住居を中心に、広場的な空間を間に挟み、散発的に6m四方前後の竪穴式住居が展開する様子が見られる。特に樋の口遺跡（2次）では中心住居（1号竪穴住居）の周囲に2面庇を持つ高床建物等が展開し、それらを他の住居と区画するような小溝が見つかった。新庄・六反田遺跡は小規模な竪穴式住居が多数展開・密集するが中心施設となるものが見られず、区画を意図する施設もなく、一般集落と考えて良い

と思われる。これらの遺跡群は土墳墓や甕棺墓を中心とした在地色の強い墓制を維持しており、後述する東部エリアとは若干異なる形態を成す。

中里遺跡 SD-01 や深田遺跡 SX-05 は、樋の口遺跡（2次）で見られるような一般集落の形態とはやや隔絶性を有する集団の盟主が築造を主導したものと考えたい。一般構成員を含めた集団の社会的エリアは前述した半径 1km 前後と思われる。深田遺跡は 4 世紀後半には埋没するが、これに後続するものとして川犬古墳群（5 世紀初頭）がある。この古墳群は本集団の社会的エリア内に所在している。1 号墳からは四獣鏡や碧玉製管玉等が出土しており、当該勢力の盟主と思われる 1 号墳の被葬者が周辺地域に対し一定の政治的影響力を行使し始めた事を示していると考えられる。



第 13 図 樋の口遺跡 2 次調査 1 地点
遺構配置図 (1/1,200)

③の東部エリアでは弥生時代後期まで拠点的な集落であった熊野遺跡内に複数の方形周溝墓が築造されるようになる。中心主体は在地色の強い甕棺の複数埋葬であるが、新しい墓制を取り入れている事は評価出来る。

同時期、熊野遺跡から直線距離で 2.2km 北方の丘陵上に辻の西遺跡が出現する。本遺跡は集落域と墳墓域が共生する複合的な遺跡で、熊野遺跡同様、方形周溝墓（一部、円形周溝墓を含む。）を中心とする墓制を採用している。中心主体を甕棺・石棺・石蓋土壇とし、熊野遺跡同様に在地色の強い墓制となっている。

また、熊野遺跡から直線距離で 800m 北北東に西原遺跡（2次）があり、この遺跡も熊野遺跡同様、群集した甕棺墓群内に方形周溝墓が築造されるが若干様相が異なる。厳密ではないが甕棺墓集中域と方形周溝墓域が分かれる事と、外来系土器の中に近畿・山陰系の他、近江・東海系の土器群が含まれている点である。新来の墓制導入と同時に外来系土器を多種多様に受容している事は重要である。

墳墓群のみではなく、一般集落群と考えられる地域もある。熊野遺跡から東南東 800m に津江・八升町遺跡（2・3次）、栗ノ内遺跡（A 地点）がある。両遺跡は調査範囲が限定的であり全容は確認出来ないが、外来の近畿系土器を比較的多く含む一部住居群と包含層を確認している。

これらの遺跡は辻の西遺跡を除けば半径 1km 圏内に存在しており、南西部エリアと同様の様相を呈している。しかしながら、在来の墓制や有明型環濠等の伝統的な文化を採用した南西部エリアに対し、東部エリア集団は内部主体こそ在来の形態を採用しているが、新来の方形周溝墓を墓制の中心に据えた事は両者の差を如実に示していると考えられる。

東部エリアにおいても、これら遺跡群の盟主が主導し築造したと考えられる、一般集落との隔絶性の高い遺跡が古墳時代前期前半に出現する。平面プランが大分県・小迫辻原遺跡 1 号居館や福岡県久留米市の市ノ上東屋敷遺跡等と類似している平田・六反田遺跡 SD-01 は、全体規模こそ不明だが、突出部を有さずほぼ正方形を成しながら完周すると考えられる断面 V 字の溝で、溝内からは多量の土器群が出土しており、在来系に混じり近畿系と考えられる外来系土器も多く含まれている。溝内部のフラット面には竪穴式住居が検出されているが、溝との軸方向に多少のズレが見られる事から慎重を要する。現在、概要報告の

段階であるため詳細は不明だが、遺構の空中写真ではSD-01に切られているものの、北辺部分に沿うように二重の柱穴列が見えており、溝掘削前に二重の櫓状の施設が存在していた可能性を示している。これは福島県いわき市の菅保B・折返A遺跡に類似しており、東部エリアでの古墳時代前期における文化受容の在り方を考える上で重要な示唆を与えている。

平田・六反田遺跡SD-01の埋没時期については前述の通り、現段階では判然としませんが、深田遺跡と同様の時期に発生している点から埋没時期もほぼ同じ前期後半頃と思われる。これに継続する遺跡として挙げられるものとして立山山古墳群24号墳（5世紀初頭～）や城の谷古墳（5世紀初頭～）がある。前者は平田・六反田遺跡から直線距離で1.7km離れているものの、遺跡から直接視認出来る位置にあり可能性は高いと考えられる。後者は直接視認出来ない遠距離にあり候補としては弱いですが、同時期築造の古墳でもあり、関連性はあると思われる。

また、弥生時代後期の拠点的な集落であった熊野遺跡内においても、5世紀代と考えられる竪穴式石室を内部主体に持つ円墳が1基確認されている。

6 南筑後周辺地域の様相

ここまで、八女平野を中心とした弥生時代中期後半から古墳時代中期初頭までの状況を概観してきたが、視点を南筑後周辺に広げた上で、深田遺跡と八女古墳群との関係を考えてみたい。

（久留米地区）

当地区では弥生時代後期後半まで存続した環濠遺跡と考えられる道蔵遺跡があるが、時期的に後続する遺跡として祇園山古墳がある。祇園山古墳は一辺25mの方墳で、内部主体に安山岩製の箱式石棺を持つ。墳丘に直接伴う遺物は出土していないが、現在高良大社が所有している三角縁神獣鏡は本古墳出土品と伝えられている。この祇園山古墳に関係してくる可能性があるとして指摘されている遺跡が市ノ上東屋敷遺跡である。本遺跡は溝が正方形に巡るもので、内部に主軸と同方向の掘立柱建物が2棟検出されている。報告者は「居館」の可能性を指摘されており、古墳時代の早い段階で前期古墳と方形環濠遺跡がリンクする可能性がある当地区最古の例である。祇園山古墳に後続する前期古墳として福聚寺7号墳や七曲山2号墳が見られるが、環濠遺跡や集落群とはリンクせず、次の藤山甲塚古墳まで時系列が途切れている。

（大牟田地区）

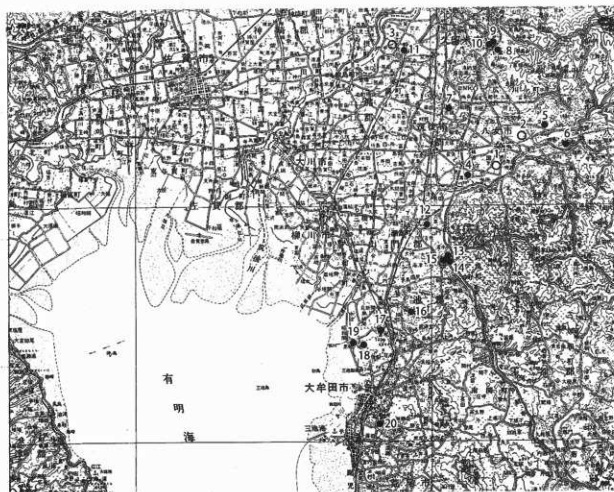
当地区で古墳時代前期に属する最古期の古墳として潜塚古墳（円墳・直径約30m）がある。主体部に2基の箱式石棺があり、内、2号石棺から内行花文鏡、銅鏃などが出土している。近年の再調査では前方後円墳の可能性も指摘されている。

これに後続する古墳は倉永茶臼塚古墳群（1～3号墳）がある。直径15m～26mの円墳群で、木棺粘土槨や舟形・箱形石棺を内部主体に持つ。1号墳は竪穴式石室内に舟形石棺を持ち、円筒埴輪や盾形埴輪を有していることから、他2基と比較しやや後出する。

4世紀後半～末頃、当地域最大の方後円墳、黒崎観世音塚古墳（約100m）が突如出現する。復元された旧地形における岬突端に選定しており、北部有明海を一望出来る位置にある。後円部の中央部分に扁平板石と粘土で構成された2基の主体部が検出された。竪穴式石槨の一部と思われ、周辺古墳の状況から内部主体は舟形石棺の可能性が高いものと考えられる。出土した壺型埴輪から4世紀後半～末頃に比定されている。

黒崎観世音古墳に後続する古墳として、石櫃山古墳（円墳・28m）がある。内部主体として舟形石棺3基を有している。5世紀中頃～後半に位置づけられる。

現在の行政単位で区分をすれば、みやま地区に所在する事となる石神山古墳（前方後円墳・約58m、



- | | | |
|--------------------|------------|-------------------|
| 1 深田遺跡 | 8 藤山甲塚古墳 | 15 赤坂4号墳 (面ノ上1号墳) |
| 2 平田・六反田遺跡 | 9 石櫃山古墳 | 16 石神山古墳 |
| 3 道蔵遺跡 | 10 浦山古墳 | 17 倉永茶臼塚古墳 |
| 4 川犬1号墳 (川犬古墳群) | 11 御塚古墳 | 18 石櫃山古墳 |
| 5 立山山24号墳 (立山山古墳群) | 12 藤ノ尾車塚古墳 | 19 黒崎観世音塚古墳 |
| 6 城の内古墳 | 13 赤坂1号墳 | 20 潜塚古墳 |
| 7 石人山古墳 | 14 クワンス塚古墳 | |

第14図 南筑後周辺の遺跡群 位置図 (S=1/300,000)

5世紀前半)だが、当地区に特徴的な舟形石棺を内部主体として3基有している事から、ここにグルーピングした。本古墳は筑紫君一族のシンボルとも言える武装石人を1体を墳丘上に樹立しており、本地区の首長層と八女地区の首長層が強力に結びついていた事を想定させる。

(みやま地区)

当地区では弥生時代～古墳時代を含む複合遺跡である山門遺跡群や藤の尾遺跡群、海津遺跡群等があり、一部には古墳時代前期集落も見つかっている。山門遺跡群や藤の尾遺跡群は地理的に隣接しており、同一の遺跡群として捉える事が出来る。藤の尾遺跡群からは数多くの畿内系土器群の出土が確認されており、出土品の状況や集落群としての存続時期、広大なエリア等を考慮すると、当地域の拠点集落と考えられる。隣接地には古墳時代中期に比定されている藤ノ尾車塚古墳(前方後円墳・5.5m)や権現塚古墳があり、当遺跡群との関連性が注目される。

山門遺跡群よりやや南に位置する海津遺跡群では弥生時代後期前半頃に瀬戸内系土器の流入が確認されており、当地域が弥生時代後期には瀬戸内周辺地域と活発な交流を展開していたものと想定される。これにあわせ、内部主体に竪穴式石槨を持ち、壱頭式鉄鏃を伴った前期古墳である辺良田古墳が本遺跡群に隣接している事は興味深い。

これら遺跡群とは別に、東部の中尾・清水地区には5世紀初頭～前半に比定される赤坂4号墳（面の上1号墳：円墳・12.4m）や5世紀後半～末に比定される赤坂1号墳（前方後円墳？）、クワンス塚古墳（前方後円墳？・推定8.4m）が築造されている。

古墳群は前述した遺跡群からは多少離れているが、拠点の遺跡群も含め全てが矢部川及び矢部川水系の1つである飯江川に挟まれた三角地帯に集中しており、この地が北部九州から中部九州を結ぶ陸上交通の主要拠点であった事を示している。

7 深田遺跡と八女古墳群

以上、地域的な概観を行ってみたが、各地域に共通する事項として弥生時代の後期から時系列的に繋がる方形環濠遺跡の存在、または、小規模ながら特徴的な前期古墳が存在している事が挙げられる。

注目すべき点は久留米地区での祇園山古墳→市ノ上東屋敷遺跡ラインが想定される事である。この事例は初現期の古墳と同時期の環濠遺跡がリンクする可能性を示したもので、未発見ではあるが、同様の事例は今後各地域で発見されるものと考えられる。

ここで、八女地区の状況に目を転じてみれば、環濠遺跡として西部地区の中里遺跡→深田遺跡、東部地区の平田・六反田遺跡があり、機能的役目が終焉したと考えられる古墳時代前期後半以後の5世紀初頭頃、それぞれの地区に直径20m前後の古墳が築かれている。

突出した規模の古墳が築造されなかった南筑後の各地域において、4世紀後半～末頃、突然巨大な前方後円墳である黒崎観世音塚古墳が有明海を一望出来る岬の先端に築造される。大牟田地区は小規模ながらも南筑後地域の中では比較的安定的に古墳築造が継続しており、当地域に在し小古墳を築造していた有力者が収斂した結果、外的要因も織り交ぜながら、地域盟主を擁立したものと考えたい。

5世紀前半になると、久留米地区で藤山甲塚（前方後円墳・7.0m）が、八女地区においては石人山古墳（前方後円墳・10.8m）が相次いで出現する。この石人山古墳出現の契機になった要素は大牟田地区と同様と思われる、5世紀初頭頃まで小古墳を築造していた地域の有力者が収斂・結集した結果と思われる。

大牟田地区、八女地区、久留米地区に在していた地域勢力の結集によって、4世紀末～5世紀前半にかけて各地区に大型前方後円墳が築かれたようであるが、それぞれの地区に古墳築造に係る内部主体の独自性があり、大牟田地区は舟形石棺、八女地区は横穴式石室に家型石棺、久留米地区は横穴式石室に石障を採用している。

これは、各地区に突如出現した大型前方後円墳の出自に差がある事を示唆しており、石人山古墳から始まる八女古墳群の基礎は、やはり八女地区内に求めるべきであると思われる。

8 各地区初現の大型前方後円墳発生 の契機

現状の状況だけで発生の契機を説く事は非常に困難で、完全に推論の域を出ないものであるが、あえて記すとすれば、都出比呂志氏の言われる「中央権力の移動」が1つの契機と思われる。4世紀末～5世紀初頭以前、王権中枢が奈良盆地に築いていた大型前方後円墳が、以後、奈良盆地から河内地区に移動し、これに連動するように全国の地方首長墓系譜が変化する。それまで築かれていた系譜が突然断絶し、小規模古墳しか築かれていなかった地域に突然巨大な前方後円墳が出現するという事例が日本各地で報告されているが、時の中央権力中枢を支える地域首長の交代・新規伸張を彷彿とさせる。北部九州の有明海沿岸部の地域首長層にもこの大変動の波が押し寄せていたものと考えられる。

氏はこれ以後の2回目、3回目の変動についても触れられており、これに付合する現象が八女古墳群でも見られる。この変動については地方の首長墓系譜に「ゆり戻し」が発生していると説かれているが、こ

の点については本稿内容が離れるため、ここでの記述は避ける事としたい。

9 深田遺跡(SX-05)の存在意義

各種「居館論」において説かれる「階層差の顕在化と隔絶性」や「規模と空間利用」、「祭祀事例や生産遺構の有無」や「防御性の強弱」、「広域遺跡群の総体としての居館」等、様々な要件が提示されているが、本市所在の深田遺跡(SX-05)にあてはまる要件は多くはない。規模としては100m未満の中規模クラスであり、周辺集落との隔絶性も絶対的なものではなく、やや曖昧な立地となっている。完周する濠が掘られるが幅も狭く防御性も低く、生産遺構や祭祀に関連した遺物が一部にはあるものの確実性に欠ける。

このようなことから、これまで「豪族居館」そのものとして評価されていたSX-05の本質は、本地域有力首長が主導して創り出した、有明海沿岸地域の結束の象徴としてのモニユメント的遺構であると考えたい。

SX-05内に残されていた小型の118号住居(SB118)出土遺物にも祭祀関連を含む特殊遺物は確認されておらず、遺跡全体が後世に削平されていたとしても形態的・内容的に一般建物である本住居のみが遺存する事は不自然である。この事からも118号住居はSX-05掘削当初に存在していた遺構で、SX-05を含む環濠部分から内側は、他に未発見である構造物と共に首長層の意思を周辺の一般構成員に視覚的に知らしめるための大掛かりな舞台装置であると評価出来る。

大分県・小迫辻原遺跡の1号居館→2号居館のように祭祀執行空間は移動するようであるが、深田遺跡の場合、突出部を有する中里遺跡の時期的関係から、中里遺跡→深田遺跡へと舞台が変化(移動)したものと捉えたい。

しかしながら、本遺構が全く「居館」とは関連のないものとは考えられず、地域首長が住まう場と一連の構造物と考えたい。比較する対象が異なりすぎるが、葛城氏の本拠地として知られ、奈良盆地南西部に所在する南郷遺跡群においては首長祭儀と生産遺構、貯蔵施設や一般集落が1つのパッケージとして存在しており、深田遺跡のSX-05の在り方も地域首長の生活域にある1つの施設であると思われる「居館に伴う重要施設」と捉えて良いものと考えられる。

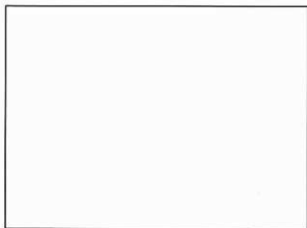
〈参考文献〉

- 寺沢 薫 1998 「古墳時代の首長居館—階級と権力行使の場としての居館—」『古代学研究』141
坂 靖 1998 「古墳時代の階層別にみた居宅—「豪族居館」の再検討—」『古代学研究』141
辰巳 和弘 1998 「古墳時代首長祭儀の空間について」『古代学研究』141
辰巳 和弘 2004 「中央氏族の本拠とその構造—「居館」論を見直す」『季刊考古学・別冊14』
広瀬和雄編『畿内の巨大古墳とその時代』
檀 佳克 2011 年代の物差しと併行関係「九州」『古墳時代の考古学』1(古墳時代史の枠組み)同成社
檀 佳克 2001 「九州出土の棒状浮文を有する土師器に関する一考察」『九州考古学』第80号 九州考古学会
蒲原 宏行 2006 「豪族の墓と住まい」(筑紫君を考える 古代シンポジウム)
岩戸山古墳・乗場古墳を守る会、八女古墳群保存整備連絡協議会、八女市文化財を守る会
都出比呂志 2011 『古代国家はいつ成立したか』岩波新書

PLATES

凡例

出土遺物に関する PL の記載は、以下の要領となっている。



遺構名

掲載番号



(1) 2次調査
調査前風景（北より）



(2) 2次調査
遺構検出状況



(3) 2次調査
SX-05 土層断面（北西より）

(1) 2次調査

SX-05 土層断面東端部分



(2) 2次調査

SX-05 内 転落石状況



(3) 2次調査

2次調査 全景 (東より)





(1) 3次調査
掘削直後 状況（南より）



(2) 3次調査
SX-05 土層断面（東より）



(3) 3次調査
SX-05 土層断面南端部分

(2) 3次調査
SB-132 全景（西より）



(3) 3次調査
3次調査全景（南より）



PL 5



(1) 4次調査
掘削直後 状況（東より）



(2) 4次調査
SX-05 半裁状況（東より）

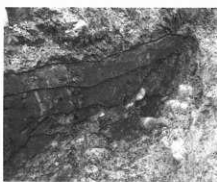


(3) 4次調査
SX-05 土層断面（北より）



(1) 4次調査

SX-05 北東側突出部 土層断面 (北より)



(1-1) 4次調査

土層断面西端部分 近影



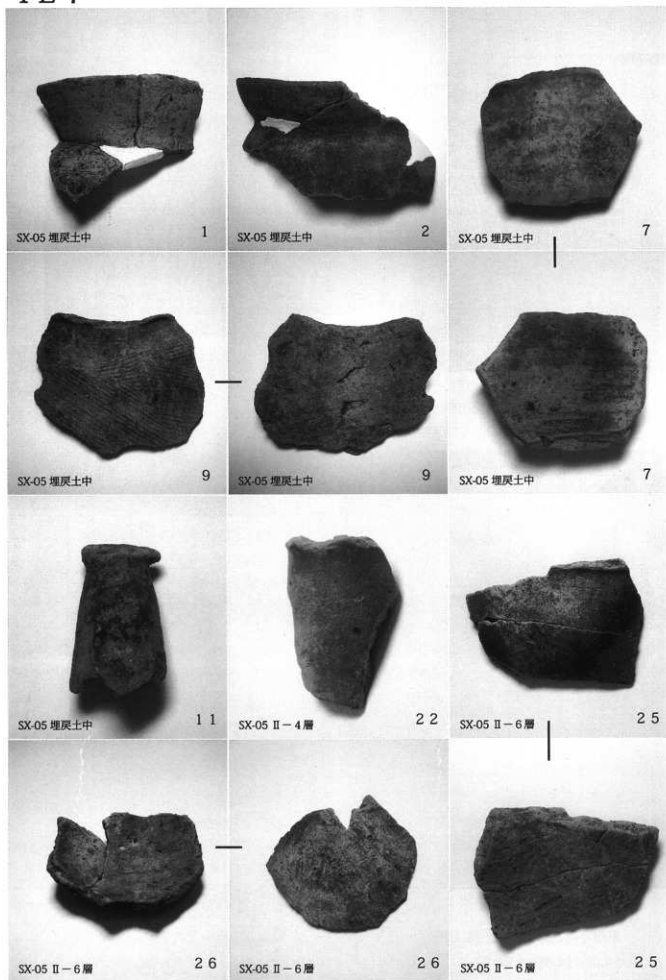
(2) 4次調査

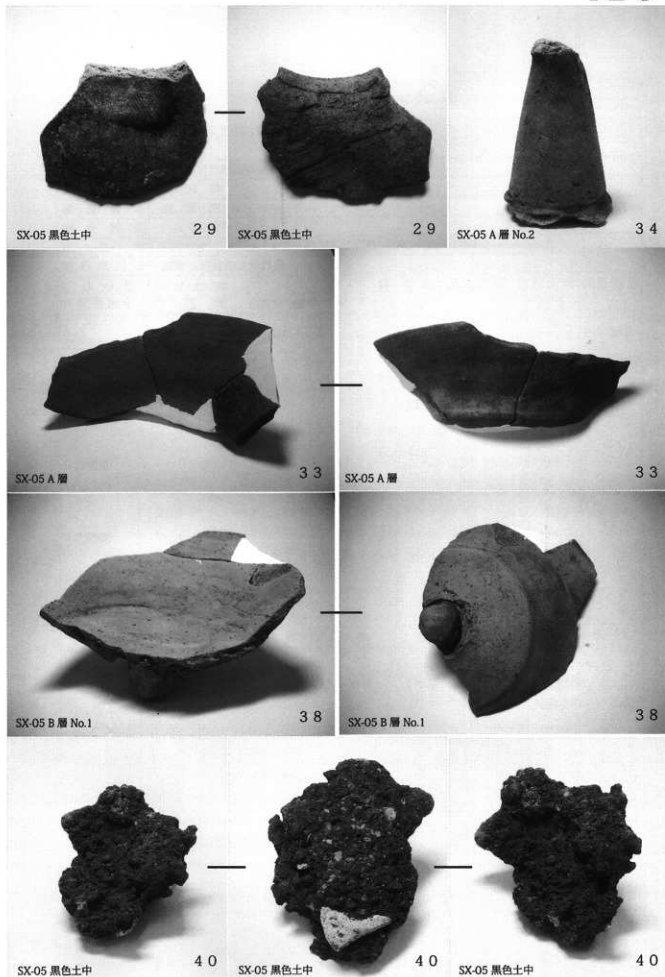
東西方向トレンチ 全景 (東より)



(3) 4次調査

南北方向トレンチ 全景 (南より)





報告書抄録

ふりがな	ふかだいせき						
書名	深田遺跡(2～4次調査)						
副書名	福岡県八女市酒井田・緒玉所在遺跡の調査報告書						
巻次							
シリーズ名	八女市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第93集						
編著者名	大塚恵治						
編集機関	八女市教育委員会						
所在地	834-8585 福岡県八女市本町647 TEL 0943-23-1982						
発行年月日	西暦 2012年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
ふかた 深田遺跡	ふくおかけん 福岡県	402109	33°11'52"	130°33'14"			内容確認 調査
2次調査	やまし まかい町 八女市酒井田・				2009, 11	48.4㎡	
3次調査	お町 緒玉				2010, 11	47.2㎡	
4次調査					2011, 11	37.9㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
深田遺跡 (2～4次 調査)	集落	古墳時代	突出部のある環濠	土師器	「豪族居館」と 呼称されている遺構		

深田遺跡（2～4次調査）

八女市文化財調査報告書
第93集

平成24年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647
印刷 (株) 東兄弟
八女市祈祷院563